



キャンパス／東京都千代田区、神奈川県川崎市 学生数／18,210人
 建学の精神／社会に対する報恩奉仕(翻案したものと、21世紀ビジョン「社会知性の開発」を掲げる)
 学部／経済、法、経営、商、文、ネットワーク情報、人間科学、国際コミュニケーション
 大学院／経済学、法学、文学、経営学、商学
 THE 日本大学ランキング2025／151-200位

CASE STUDY

全学共通の視点で回す “教育の質向上”のスパイラル

専修大学

検証すべき観点を組み込んで教育課程を構築、検証結果を新カリキュラムに生かす。専修大学はこのスパイラルを、全学共通の視点、スケジュールで動かしている。



前・ネットワーク情報学部長 (内部質保証推進委員会委員)

松永 賢次

まつながけんじ ●慶應義塾大学理工学部管理工学科卒業後、同大学院後期博士課程単位取得満期退学。1995年専修大学経営学部に着任。2001年新設のネットワーク情報学部に移籍。2017年9月～2021年8月、同学部長を務める。

全学部・学科のDPを 貫く共通観点を策定

本学は5、6年ごとに行っている全学カリキュラム改革を節目に、教育の質向上施策を進化させてきました。

DP・CP策定、全学共通教育の整備など、ひととおりの形を整えたのが2014年度のカリキュラム改革でした。その後、質保証を担う内部質保証推進委員会などの組織が動き出し、カリキュラム・マップ等の点検・評価ツールを導入するにつれ、課題が浮かび上がりました。最大の課題は、建学の精神を翻案したビジョン「社会知性の開発」と、DPの不一致。各学科がそれぞれ育成したい人材像を掲げてきた結果、本来、全学が共通してめざすべきビジョンが、まばらにしかカリキュラムに織り込まれていない状況でした。

そこで、執行部と教務課を中心に、「社会知性の開発」を頂点に3階層からなる全学DPを作成。これを「学修成果を示す共通観点」と位置付け、各学科のDPは、全てこの観点に沿って策定することとしました。達成度が測定できるDPにするため、アセスメントプランも同時に策定。学部・学科によって解釈の違いが生じないように、全学DPの文言は、一言一句まで徹底的に議論しました。

最初は不完全でもいい 実践しての気づきから改善

2026年度から導入する新カリキュラムは、このようなプロセスを経てアセスメントプランで検証した結果を反映した初のカリキュラムとなります。

質向上の取り組みで留意したのは、最初から満点はめざさないといいことです。まずは学科ごとに実践して、点検・評価の意味や、自学科のよい点、悪い点に気づけば、改善に向けて各学科が主体的に動くだろうと考えたのです。例えば、ある学科から、育成する資質・能力に偏りが生じているカリキュラム・マップの提出があったとしたら、「マップを縦に、つまり資質・能力ごとに見てみてください」

「とだけアドバイスします。教員に気づかせる、そのちよつとした遠回りも、質向上のスパイラルを自律的に回す力になるからです。このような手法がとれたのは、本学の強みと危機意識を全学で共有できていたからです。競合校と比較した本学の強みは教育力ですが、今後の18歳人口減を鑑みると、教育にさらに力を入れなければ生き残れないポジションにいるとの見解が、ほとんどの教員に共通しています。それが、教員の主体的な質向上に期待した理由です。

次に取り組むのは、教員が実感する教育効果、学生が実感する成長の可視化です。授業評価や学生満足度は高止まりし、経年比較に適していません。行動特性や姿勢は何か高評価にあたるのか一概に言えず、安易な数値化は早計だと感じます。学生の成長実感を重視するならば、アンケートの自由回答やインタビューで声を集め、分析する形が適しているかもしれません。私が所属するネットワーク情報学部では、試行的に、学生に自身の学修経験を整理してもらっています。成長や満足をいかに可視化して質向上につなげ、社会に発信するか。次期カリキュラムの構築を進めつつ、満点ではなくともベターな方法を探っていきます。

教育機関として成長する大学への取り組み

| | 2014年度カリキュラム改革 | 2019・20年度カリキュラム改革 | 2026年度カリキュラム改革 |
|---------|--|---|--|
| 質施策 | <ul style="list-style-type: none"> ▶ DP・CPの策定(2012年度) ▶ シラバスの改善(2012～2017年度) ▶ 成績評価基準等の変更(2013年度) ▶ 試験実施方法の変更(2013年度～) ▶ 全学カリキュラム協議会発足(2013年度) ▶ GPA制度の導入(2015年度～) ▶ 卒業生アンケートの実施(2015年度～) | <ul style="list-style-type: none"> ▶ 「教育の質保証に向けた取り組みについて」検討開始(2015年度～)。「GPA制度」の活用事例等の提示、「学生による授業評価」の全学的実施に向けた検討、カリキュラム・マップ、コース・ナンバリング、ルーブリック、アクティブ・ラーニングの6項目の検討 ▶ 教務課にIR機能設置(2018年度) ▶ 内部質保証推進委員会の設置(2019年度) ▶ 3つのポリシーの改正、アセスメントプラン策定(2022年度公表) | <ul style="list-style-type: none"> ▶ 全学カリキュラム改革に向けたロードマップ作成(2022年度) ▶ 教育上の各種データをモニタリングできるダッシュボードの運用開始(2022年度) ▶ プログラムレビュー実施(2024～2025年度) ▶ カリキュラム改正資料作成(科目ナンバリングコースコード表、カリキュラム・マップ等／2023～2024年度) |
| 教育改革・改善 | <ul style="list-style-type: none"> ▶ 全学でのカリキュラム改革(2014年度)→全学共通の「転換・導入教育課程」「教養教育課程」を編成。「学士課程教育」の概念を念頭に、学部・学科にかかわらず身に付けておくべき能力を養成 | <ul style="list-style-type: none"> ▶ 全学でのカリキュラム改革(2019～2020年度)→全学共通の「転換・導入科目」「教養科目」「外国語科目」を編成。新学習指導要領との接続を見据え、高大接続の概念を明確化。各学部・学科が、人口減を含む2040年社会を念頭にカリキュラム編成 | <ul style="list-style-type: none"> ▶ 全学でのカリキュラム改革(2026年度予定)→全学共通の「社会知性基盤科目」「教養科目」「外国語科目」を編成。新学習指導要領との接続を見据え、高大接続の概念を明確化。各学部・学科が、人口減を含む2040年社会を念頭にカリキュラム編成 |



注目

教育目標から授業までの一貫性を重視 サイクルのパフォーマンスを2つのしくみで確認

専修大学の教学マネジメントは、カリキュラムとアセスメントを逆向きに設計している点が特徴だ。カリキュラムは、教育目標「社会知性の開発」を起点にDPを策定し、授業に落とし込む。ここまでは一般的な手法だが、教務部IR担当の西山慶太氏は、これを逆からなぞる形でアセスメントを設計した。学修成果は成績評価の集合体であり、適切な単位の修得が教育目標達成につながるという考えだ。アセスメントプランには、サイクルの健全性を検証する2つのしくみが盛り込まれている。一つは「モニタリング」。卒業生の単位修得状況や授業評価アンケートなどの定点観測項目が学部・学科間で比較可能な形でまとめられたダッシュボードを毎年確認する。もう一つは「プログラムレビュー」。カリキュラムの成果、課題を包括的に振り返るしくみで、カリキュラム策定後、最初の卒業生が出る4年目を目安に1、2年かけて行う。

2025年夏現在、現行カリキュラムを対象に、同大学は初のプログラムレビューを実施中。「自分たちがつくったものを検証し、改善する感覚が全学的に根付いてきているのを感じる」と教務部部長代理の佐藤孝博氏は話す。

カリキュラムとアセスメントを逆向きに設計

